

近藤芳美賞

(新作十五首)

空のたまゆら

平尾三枝子

(岡山 74歳)



私の尊敬する郷土の詩人・永瀬清子が終戦三年後に謳われた詩に「降りつむ」というのがあります。

かなしみの国に雪が降りつむ

かなしみを糧として生きよと雪が降りつむ

失いつくしたものの上に雪が降りつむ (中略)

その下からやがてよき春の立ちあがれと雪が降りつむ

(以下略) 『美しい国』より引用

あれから七十三年、先人の方々が苦勞を重ねて築いてこられた平和に翳りが見えはじめたように思える昨今、何かせずにはいられない気持ちで詠んだ歌にこのような名譽ある賞をいただきましたこと、驚きとともに厳肅な気持ちで受けとめております。

選にあたって

「ひもじい」が死語となりゆく炎天の七十三年目の夏蟬時雨の一首が示しているように歌語をたくみにとり入れながら、原発問題や沖繩の現状にふれています。社会問題につねにつよい視線を注いで作歌し、評論を書いた近藤芳美のことを思い出すとき、このような連作が、近藤芳美賞にふさわしいと思つて賛成いたしました。(岡井 隆)

いうまでもなく近藤芳美は、戦後派を代表する存在で、終生社会派歌人として功績を残された。受賞作は、その遺産を継承するに相応しい。原発の再稼動を危惧する歌にはじまり、『ヒロシマ・ノート』の再読を求め、基地建設に異を唱えるなど、視野の広い一連となる。さらに平穏な存在の象徴として、シャガールと魁夷の馬を詠み込み、国境のなき空を渴望したことも、一連を貫く平和願望を暗示するという、潔い成果がうかがわれる。(篠 弘)

たしかに、何ごともなかつたように日々人は生きています。しかしここにうたわれていることは原発再稼動と大量のデブリのゆくえをはじめとして、ヒロシマ、ナガサキ、そして沖繩の現実など、今日の情況と深くかわることである。それらが簡潔な無駄のない言葉でうたわれ、作者のマグマのような思いが強い言葉のひびきをなしている。そしてさらにこの日常の中に「暗黒のヒエラルキー」の広がりを目指しているのも怖しくかつ新鮮だ。(馬場あき子)

何ごともなかつたやうに木々は萌え原発つぎつぎ再稼動する

七年を経ても廃炉の目途たたず八百八十トンのデブリのゆくへ

大暑近き知覧特攻観音堂かたはらに添ふ褪せしあぢさゐ

永遠に若きままなる特攻兵 千三十七名の生の眩しき

一国を率ゐる人よ願はくば戦ひの野の前線に立て

「ひもじい」が死語となりゆく炎天の七十二年目の夏蟬時雨

黙禱と『ヒロシマ・ノート』の再読を捧げて炎暑の八月を終ふ

おほどかな「なんくるないさ」の民にして「みるく世がやゆら」と問ふは悲しき

ウチナーンチュウのために削りし命なり翁長氏に捧ぐ無数の黙禱

ガンジーのごとき痩せたる奄美人しまんちゆうの六十五年を眩しみて見つ

ホノホシの波に洗はれ玉石は基地なき平和の徴となれり

暗黙のヒエラルキーの満ち満ちてこの世は狭く狭くなりゆく

シャガールと魁夷の馬が天駆ける国境のなき空のたまゆら

不条理も条理も丸ごとこの世なり土手に赤白曼珠沙華の群

幾重にもかさなる雲の間より射し入る光を希望と呼ばむ

岡井 隆選

選者賞

メロンに傘

岡田 美幸（埼玉）

回想は回送電車に乗せた今 時は体に染み込んでくる

ひゅんひゅんと通り過ぎゆくかなしみを光らせるためのぞみと呼んだ

いのちからひとつ名札をぶら下げたアドバルーンは深海の色

標本が欲しいと言えば夢でなくカタログになる昆虫図鑑

子供用布団の柄のくまさんも眠ってきみと夢を見ている

月さえも眠り巢にいる蟻たちは昆虫式の寝息をたてる

空っぽのブリキの如雨露を傾けて水中花には無を与えよう

触れないものをつくるよ通過する新幹線はやぶさの色

まんぼうの昼寝のようなお祭りで手をつなげずにつなはず歩く

ドーナツの穴の向こうに行きたくて言葉で言葉の向こうをつくる

地球から外出禁止のぼくたちに宇宙の涙みたいな雨を

家というアンモナイトの殻の中やわらかすぎる生身をしまっ

満月で無線電波を反射させCQCQどこにいますか

メロンって雨でいたんでしまっから畑のメロンに緑の傘を

永遠に手をのぼそうと歌う日々 たんぱく質の体のままで

選評

「メロンに傘」の岡田美幸さんは、自在に暗喩を使っているのを愉しく読みました。「回想は回送電車に乗せ」など同音異字の使用も自在です。「ドーナツの穴の向こうに」「地球から外出禁止のぼくたちに」「メロンって雨でいたんでしまっから」の三首にあらわな物語性のたのしく、これを選者賞にしました。

奨励賞の「吾が生業」は、仕事の歌です。写実的に、丹念に歌っています。その作歌態度に共感しました。今回の応募の中には、写実的な仕事の歌もいくつもあって、わたしはこれからも、特に男性たちに、それを期待しています。

もう一人の奨励賞の「夕星」は一首一首の完成度が高く、よい連作でした。「秋の野にわたしがひとりになりたいと願うひとはあなたとふたり」の謎めいた構成もよかったと思いました。「さびしいかさびしくないかとみずからに問うことすでにさびしい遊び」のような言葉遊びも決まっっていて、その才気は今後の作歌に期待させられます。

今回の近藤芳美賞は、力作が多かったという印象です。

奨励賞

吾が生業

徳増 善久（愛媛）

ボイラーのチューブの穴明き原因を調べるために現場に向かふ
また熱の籠もりし炉内に潜りこみ穴明きチューブら隈なく探る
穴明きはチューブの外表面腐食にて行きしと定め調査に当たる
纏むれば、温度が高く灰積めるチューブに腐食の偏り見らる
また灰の中には鉄サビ大量に含まれしこと明らかとなる
運転の条件あまた調ぶれば積りし灰がなにやら匂ふ
刑事らが犯人探しをしてゐるやうな吾の仕事の今日も暮れゆく
寝枕にはつと浮かびし原因のひとつ因子をメモに書き留む
なけなしの金で買ひたる便覧の一図に吾の目くぎ付けとなる
鉄サビに酸化作用のありしこと。この図は示せりわれ昂奮す
燃焼のガスに含まる「SO₂」灰の中は「SO₃」となれり
つづまりは排水を燃やししガス中で生れたる硫酸腐食と言へり
この論で講じし灰の除去策が功を奏して腐食止まれり
金属の腐食現象 自然なる水の低きに流るることし
ボロボロの腐食便覧ひらくとき吾が生業の時し思へり

奨励賞

夕星

福西 直美（京都）

夕立をあげてひっそりつるばらのつばみの朱の色深まりぬ
その色は真珠のように透きとおる白き肌なり嗣治の裸婦
腰ふかく座る長椅子愛されているのかでなく愛しているか
ひとり居てひとり照らされスチールの机に太き指の影あり
もの言わぬ口ほそく開け二つ穴コンセントあり柵のうしろに
角欠けて箱におさまる氏名印一文字六十五円の名前
どの向きがあるべき姿か分からねど台に立たされいるセロテープ
ひとりひとりスマホのゲームをして帰るほんやり汚れたバスの座席に
砂浜に下り立つあしたの波の音聞こえて爪先から海になる
水あさき川面に遊ぶセキレイの二羽おり君をまた思いおり
秋の野にわたしがひとりになりたいと願うひとりはあなたとふたり
さびしいかさびしくないとみずからに問うことすでにさびしい遊び
草焼いて燃やしてしまえ曼珠沙華 岸辺いちめん気の狂れるまで
橋のように鳥籠のように立っていたい遠くへ雲が去ったあとにも
夕星が光をこぼす いま誰か天に召されたような瞬き

選者賞

沈黙の海

ゴウヒデキ（東京）

まず瘦せた土地の者から熱心な信徒になると聞くぞ悲しき

神子よりも慈悲を求めてあたたかな聖母にすがる過酷な生は

積年の祈りを浴びて暗がりには顔を伏せるマリア観音

仏葬の経を打ち消すオラシヨあり祈る嫗の手の皺深し

二十六聖人像の足先は苦難の土地を離れて浮かぶ

ゴルゴダの丘へと向かう坂道の好奇の眼嘲笑の口

引き回すキリスト者に投げる石抵抗されぬ安心あれば

足指の痕の黒ずみその板の中のキリスト顔を失う

地の熱の地獄の熱を浴びせられなお身に熱し信仰の熱

パライソはどこにあるのかどこまでも黒く広がる悪意の雲は

朝靄の海に浮かんだ船のうえ教会は立つ父のごとくに

教会を建てる木材手のひらに炭で焼かれた手のひらで持つ

殉教の島の岩肌大波が洗う鬼百合血の色の花

追い詰めることの悦楽今もなおインターネットを這いずる荊

血と祈り 時の鉛を飲み込んで長崎の海沈黙の海

選評

選者賞として「沈黙の海」を推す。目下話題となつているキリスト教徒が迫害された、その史実を追う。遺跡を取材した形となつているが、もう一つ臨場感が欲しい。舟越保武の彫刻「二十六聖人像」も詠まれ、その下句が様式化されたことを憂える表現などは、むしろ成功しているように思われる。全体にもっと訪れた地名を出すべきであった。

奨励賞の「やはき曲線」は、被爆されたヒロシマを追懐したドキュメント。一瞬にして亡くなつた動員学徒をモチーフとして、その悲劇が再現されている。十分に抒情化された表現力を認めたいが、二番煎じのうらみが免れがたい。〈鉄骨の修復されて延命を受け入れる人のごとくドームは〉のような、批評性をつちかうものが、もっと欲しかった。

やはり奨励賞の「ブラックアウト」は、北海道の胆振東部地震に着材した、きわめて新しい作品。現地に近く、いかに停電や断水に苦しんだかを、生活詠のスタイルで詠んだ一連で、かなり説得力があった。素直な感受性が溢れていたが、機会詩の域を超えるような努力を待ちたい。

上位の作品は、十五首なりに主題意識をもつていたことを付け加えておきたい。

奨励賞

やはき曲線

岡本 秀美（愛媛）

八時十五分の鐘の音全身を波立たせてゆくヒロシマの夏

ひと呼吸置きてはじまる被爆者の声に重なる蟬の群声むらじゑ

身の内の炎ふつふつ語部の言霊一つ受けとることに

平和の灯ゆれて楠の葉広がりてヒロシマといふ箱庭に立つ

十代の夢とは 学徒動員に詰め襟を着て鉄を流しぬ

作業場の窓閉ざされて一心にミシン踏みをおかつぱの学徒

最期の日と知らず八月六日朝 市内へ向かひし学徒七千

一瞬にして消え去りしヒロシマの中島地区四千四百人

ヒロシマの地下に昔の街並のほひて遺骨のこゑがきこえる

広島を償まはふてくれ！ヒバクシヤの平均年齢八十を越ゆ

〈天命〉の言の葉かろし原爆の子の像の鐘総身に受くる

供養塔の草むす土たまひよ魂の座れるほどのやはき曲線

鉄骨の修復されて延命を受け入れる人のごとしドームは

〈きみがここにゐてくれたなら〉記されて折鶴は会議の椅子に待ちをり

十六万余の魂たまひに寄りそひて星より降りくるやはらかな風

奨励賞

ブラックアウト 住吉和歌子（北海道）

両親が旅行へ出かけひとりきり自由と不安ふたつ抱えて

夢の国のアトラクションに揺さぶられ飛び起きた夜ブラックアウト

暗闇の右手探りで移動する はじめて使う懐中電灯

キッチンの最後の水の一滴が虚しく垂れて断水となる

停電で自動的にマンションはオートロックの機能を失くす

飲み水を汲みに十回往復すエレベーターは止まったままで

水運ぶご近所さんの挨拶は「お疲れさま」とみな疲れ顔

かろうじて夕刊届く地震の日 特別紙面は死者を伝える

だんだんと暗くなりゆく夕まぐれLEDのろうそく灯す

ちゃぼちゃぼとトイレタンクに水たまり停電断水終わりを告げる

安堵して水をごくごく飲みながら〈いのちの水〉とつくづく思う

一日で停電復旧したことに言葉にならぬため息ひとつ

「無事です」と報告すれば喜んでくれたる人の絵文字に和む

帰宅した両親はこの震災を免れ我の涙を知らず

地震にて倒れた時計 動かない針は三時八分を指す

馬場あき子 選

選者賞 空の底

田中亜紀子（三重）

選評

今回も古びを知らぬ題材として、戦争経験者や引揚者の忘れがたい思いを詠んだ歌が沢山投稿されてきた。そしてもう一方に今の沖縄の現実を告発する歌があり、それらが重なって読めてくるころに今日の課題があると思われる。こうした歌の作者は六十代以上に多かった。また五十代の作者の傾向には辛い職業にたずさわる現場や家族を抱えての困難を克服しようとしての歌、より若い四十代では非正規就労者やアルバイト、求職、介護など、今日の先端的な社会問題を含む歌も多く、十五首というまとまった作品の主題である点でアピールの力が強い。

そしてもう一つ、さわやかな言語感覚をみせてくれた十代から四十代へかけての歌が増えつつあったことに注目した。本来的にはこの世代が主力になるとき、短歌は徐々に変化してゆくのだろうと思う。

選者賞の田中亜紀子さん「空の底」は、学校生活、中でもクラスの中の自己の位置の保ちがたさをうたう。教室は閉塞した海の底の底だという。「友達は作らない」「仲良しごっこ」「ばい菌」の子、涙を隠した薄笑い、「サバイバルゲーム」。子供の世界に蔓延するこの幼稚な怖しい人間関係こそ今の日本の縮図だろう。

友達は作らない主義ぬばたまの人の心が恐ろしいから

本当のことを言わない人だねと言われて探す本当のこと

私を嫌う子がいて私はその子のがどうでもよくて

グループを作れと言われ体育もお昼休みもいまずぐ終われ

髪型を褒めて持ち物また褒めてみんなしている仲良しごっこ

殊更に大きな笑い声立てるこっちへ来たらと誘うみたいに

唐突に会話は終わるばい菌がクラスメイトに近づいたから

泣けばもういじめられっ子確定で平気なふりをして微笑んだ

教室は人閉じ込める空の底あるいは海の底のまた底

透明な存在目指し息殺す転校生はすぐに撃たれる

サバイバルゲームだ今日も学校は下校時間は延長戦で

陰口を聞き流しつつ目に入る限りの活字練り返し読む

一人でも平気一人が大好きな変わった子として空を見ている

みじめでも私は私都合良くあなたのために生きてはいない

会う人の善意疑う事のない子ども時代の私さよなら

奨励賞

秋のまきば園

菅原 恵子（秋田）

小岩井の本部に賢治いるようだ「えぐ来たんすな」にこにこ顔で

小岩井の本部の建物昔のまま 明治の大工の腕の確かさ

気品ある制服を着た案内人賢治の童話ぬけたるような

まきば園大空雨の匂いして羊一匹近づきてくる

羊シヨ一の仕事解かれし老犬がわれを見ている「同類かな」と

牧場のなかの大樹は小檜なり暑さに弱き牛たち涼む

下手なれどわれも口笛吹いてみる太陽系の秋のまきば園

ほろほろと野菊の花の散る径にこおろぎが鳴く花散るよう

葛の花ちらばる径を歩むとき戦の不安にかられてしまふ

不毛地に二千六百町歩の農場ひらくまでの歳月

秋霖の晴れゆく森を甲高く啼きつつ雄の雉子走りくる

永遠の時の流れにさからわず今を生きいるムカシトンボは

若き日に石ッコ賢サンに憧れぬ今も引き出しに朱石白石

麻袋に山ぶどうの香を背負いつつ農場の坂のぼり来る婆ばば

岩手山に見送られつつ帰りくる紅葉のもゆる仙岩畔

奨励賞

極寒夜

鈴木 健（東京）

鉾山の発破の響きが子守歌 日々砕け散る僕のふるさと

労災で父が落とした薬指 さびしからずやキルンの迷宮

メーデーを颯爽と歩む父の背にわれも呼応し列に加わる

労組なき母の縫製工場はいつも灯りの絶ゆることなし

内職を手伝う子らのはしゃぎ声 小さな灯り囲む秋の夜

学ぶため新聞配る君の眼が持たざる者を照らす灯となる

極寒夜 独り階級闘争を企図して眠る「有職少年」

労働の対価で購う歌の書を人足繙く秋の道ばた

仲間をば庇い負いたる腕の傷シャツをまくって今日の始まり

また若きゼンソク持ちの運送屋 瞳の奥の修羅の暗がり

梱包の甘き箱には夜叉となる片手にガムテ猛き若人

作業場の割れた鏡に映らざる昨日餓首された君の変顔

剣の道極むが如く伝票を睨む漢も飛ぶ夢を見る

カーボンに触れることなき職制のわが夢弾く白い指先

どの道を辿りここまで来たのかとわが身重ねる破れた荷札

入選

※十五首のうち、八首を抄出しました
都道府県別名前五十音順に掲載してあります。

風の言葉

木立 徹 (青森)

ふりそそぐ夏のひかりを敷き詰めて影を寄せ合ふ銀の砂浜
顔があるはつきりしない輪郭が何かを言ひ残し消えてしまつた
驟雨去り失ひかけてゐる何か取り戻したくて君と抱き合ふ
肉体をどこかへ忘れて来たやうに君はそろりと影を動かす
書きかけの君の詩篇が卓にある余白にひとつの言葉を残し
窓に寄り胸の芯までゆつくりと茜に染まる ゆふぞらかなし
君との日々別れてのちに読み返す未完の短篇小説のやうに
落ちてくる風の言葉をまた一枚重ねてひとつの季節が終はる

オカリナ

小野寺寿子 (宮城)

夕日色の小鳥のようなオカリナを二つ買いたり夫とわれとの
朝朝に夫とわれ吹くオカリナに時折り鶯が鳴き声合す
オカリナに合わせホームの人達が歌いてくれる声のまぶしい
オカリナに唇触れれば意地悪なわれに素直な心戻り来
元氣ねと言われうなずく度毎に私の首が細くなりそう
夫吹きし「アメージンググレイス」が病みたるわれの十年支ふ
彼の岸へ渡る時にはもう一度あの時の曲聞かせてほしい
オカリナの稽古始める朝八時背なを伸ばして夫と並べり

ひかり集めて

根本由紀子 (宮城)

山裾ゆ早苗ゆらして来る風にわれも吹かれて悉皆草木
なんとなくそこでなければ言ひ出せぬ話あるらし鯛のベンチ
女の孫はわが失ひしを数多もつたとへば黒髪かけつこ逆立ち
八歳の持ち重りする髪束梳るときわが手にうねる
雪山のやうなあぢさゐりに囲まれて寺の書院に心経写す
ゑんどうの莢のさみどりぶつくらとひかり集めて母の忌近し
舗装路の光と影の界をゆく叔母の最期を見送りし午後
大文字の送り火終へし暁の東稲山に光あまねし

時の結び目

武藤 敏子 (宮城)

うつし世は虚構と思ふ昼さがりグレーの猫が線路をわたる
今われは透けてゐたるやゼブラゾーンを人居ぬ如く車通過す
狂はずに生きゆくことの難ければわが立ち位置をはつかにずらす
物語の頁を逆に繰りゆけばなつかしい人に会へるだらうか
台所と居間を隔てるカーテンの如きものかも生と死の間
朝顔をつぼみに戻していくやうに浅葱の日傘螺旋にたたむ
「お入り」と名を呼ぶ声に縄跳びの輪に入るやうなものかも死とは
玉の緒の絶え間なき時結ぶことこのうつし世を生きてゆくとは

米沢盆地

池村 真理 (山形)

サルビアの青なほ深き夕暮れの雨の匂ひの坂を下りぬ
白秋の道に迷ひて日は暮れて父母を亡くしてほろんとひとり
欲しいのは何かではなく誰かだと落ち穂ぬらして細き雨降る
亡き母の口紅さして見上ぐれば浅葱の空に雲のひとつひら
稲茎のならば刈田の淋しもよ米沢盆地にみぞれ降りしむ

明け暗れに「死んでもいい」と夫拒み抗がん剤は五錠残り
雪の舞ふ夜半に流るるりフレイム「人生が二度あれば」と歌ふ
来世には小さき海月に生まれたし波に漂ひ気ままに踊らむ

混ぜ垣

寺山 昭彦（茨城）

病室の前で呼吸を整えてふらつと寄った息子を演じる
少しずつ部品が外れていくように父の呼吸が乱れてゆけり
逝く人を送りたる者散り散りに水銀色の日照雨の参道
濃き闇に身体を浸し亡き父と孤独の隣を歩いていたり
感情の持ち合わせなく三日目の風船のごとただ座りおり
思い出を手渡し飾る雛の壇男雛女雛は嫁ぐ娘が
混ぜ垣に遅速はあれど咲く花の各々の春確かに来たり
ありふれた幸せという奇跡なる日々が手帳に記されており

まほろばの歌

曾川 文昭（栃木）

壊れゆくこの国なりや大宮へ向かふ車窓に富士はうるはし
二極化の極のひとつを思ひつつ麦酒を飲めり楽しからずや
万力で締め付けらるる木材の黒き固さを思ふことあり
ゆかしきはこの国の古きかなづかひ淡き調べはこころに潜む
すめらぎの祖は半島より来しといふ説に思へり言葉と歌を
おほきみの大船団が半島を出で立ちし日に歌ありぬべし
目をつぶり耳を澄ませば海の声埋め立て阻止にわれをいざなふ
まほろばの歌を詠みたし秋の日に麦酒きらめくわが中年期

季の移ろい

長嶋 禎子（栃木）

古い就きて月の歌会もままならずうつつとせり春というのに

花吹雪く公園の中ブランコの子らは高々と青空を蹴る
たちまちに田植え終わりに早苗田に五月の光きらきらと満つ
早苗田はたちまち育ち濃き緑風に輝き病む目に眩し
夏の日が草取る背に容赦なく差してドクダミ強く匂えり
走りゆくフロントガラスにしがれきて落ち葉舞う道秋深まりぬ
日が昇り今日の始まりスピードを上げて一日過ぎて行くなり
わが母の逝きしあの日は八月十日篠突く雨のまざまざ浮かぶ

オキナワ

みやざわあき（群馬）

辺野古の海に杭の打たれてエメラルドグリーンが割れてしまった
熊さんがはつつあんをはつつあんが熊さんを監視する辺野古の海辺
土砂投入の青きクレーン上下して海の青さがぐんぐん沈む
まんじゅしゃげ引き抜くごときデモ隊の強制排除に睫毛が痛い
米兵が行き交う街に梯姑咲くここはオキナワ軍事基地満つ
レモンサワー飲みいる朝飛び立てるオスプレイの音が喉にぶつかる
オスプレイ電子辞書にはまだ載らず「未亡人製造器」と呼ばれる
校庭にドッジボールをする子らの頭をなでてゆく爆撃機の影

板場

粕谷 艸水（千葉）

調理場に盛りたる塩の白じろと庖丁始めの朝が始まる
寒潮に身の締まりたる黒鯛の姿造りの尾鰭が跳ぬる
糶市に出せぬと海士が疵鮑幾つか置きて帰りゆきたり
常連の客の持て来し胡瓜五つそれぞれ黄金の小花をつけて
大陸のいづこの海の砂ならむ大き浅蜷をざくざく洗ふ
糸造りにせんと腸抜く槍烏賊のキユツと啼きつつ指に吸ひつく
鮮度よき烏賊にも寄生せる「アニサキス」冷凍庫にて凍て締め殺す
調理場に煎るカレー粉の良き香とぞ開店待てぬ客の入り来ぬ

介護日記

小林 直江（千葉）

今日の日も穏おだしくあれよ我が夫よ介護す我れも老いの身なれば
その意味は不明なれども手を叩き樂しげに一人言云ふ夫を愛しむ
デイ・ケアに夫送り出し一人居に初蟬の声しみじみと聴く
髪も生え爪も伸びるに我が夫よ脳の縮むを止める術なし
暑氣至り甚平に着替へし夫の足白く細きをそつと撫でやる
足許まで白々と照る月仰ぎ夫を支へて初詣に向ふ
我が夫よ六十余年を連れ添ひし我が名我が顔忘れ給ふな
生かさるる生命と思へば有難し白寿間近の夫介護する日々

余光なほあり

佐藤 夏生（千葉）

三坪の書庫の埃をはらひたりわが途を決めし著者のあらはる
新刊の資料はいつか遠のけりヒグラシ鳴きて余光なほあり
闇の中ペンライトもて少しずつ進むやうなり外国語を読む
二千年の都の地下より見上ぐれば出口は夕空萋色なり
立て看とアジ演説の日本語が礫と化して飛び交ふキャンパス
フランス語選択の子らと春ごとに会ひては別れ四十年を過ぐ
Coppeコッペ出でし亡命作家の馬車の旅その経由地を地図に確かむ
パリ盆地なほ身近なりキャストのテロ告ぐる声ビュッの歌声

ガタルカナル

鈴木ひろ子（千葉）

地図みれば思ひの外に遠くあり訪はんと決めしガタルカナルは
ウエルカムウォーミュージアムと看板のありて錆びたる戦車が並ぶ
弾のなく食糧もたぬ兵士らがエスペランサ岬めざしたりとぞ
撤退の浜にやうやくたどり着きそこに逝きたる兵の碑があり
ソロモンの珊瑚の混じる浜に立ち足をひたせば波温かし

アメリカの戦争記念碑たつ丘にプルメリアの白き花あふれ咲く
日の暮れてキタノホテルに憩ふとき雨の音する強き音する
とびたてる機より下方に虹が見ゆガタルカナルのジャングルの上

図書館のバックヤード

蝦原加奈子（東京）

大学で学生先生いずれでもなく働く席が図書館にあり
東から射し込むひかりを浴びて待つカバー外した素顔の本たち
書架にある数万冊の一冊も読めずに並べる時間が過ぎる
挟まれて茶色い影に焼きついた頁のあいだの五十年前
背ラベルのひとつひとつを塗る作業二十年後も残るだろうか
ページ繰る仕事たちまち探るのが奥付となる目録担当
ピピッとデータ引き出す右手には慣れた構えのバーコードリーダー
図書館は、かたちを変える〈本〉と人、出合いを紡ぐ場所でありたい

冬の終わり

澁那本気子（東京）

昨日までできて当然だったこと突然何もできなくなった
うつ病と診断されてなかったら自分で自分を殺めただろう
寝て食べて薬を飲んで天井とにらめっこして過ぎた六年
人生に無駄はなかった回文と短歌に布団の中で出会えた
「週四日一日四時間ならいいよ」十年ぶりの就労の許可
副作用とはいえ二十五キロ増え入るスーツが一着もない
タッチタイピングを求められている未経験可の求人なのに
何もない私の道に種を蒔く冬の終わりを信じて進む

母親失格

佐々木優美子（東京）

たくさんの助け借りねば児ひとり産み落とせないはだかの猿よ
真夜中のケダモノと化して咆哮し朝陽を浴びてハハオヤになる
ああわたしも獣であった 血まみれの赤子はぶたれて産声あげる
授乳して秤の皿に子をのせて目方増えねば母親失格
母性ならなみなみとあつたはずなのに後何グラム足りないだろう
お母さんでしようと言われ涙するわたしはやはり母親失格
乳輪は意外に脆く傷ついて傷つけた子は無垢な寝顔で
泣き声を聞いて翻訳してくれるアプリが今ならあるかも知れぬ

これから

高橋 千恵（東京）

花びらをちぎってばかりいる夕べ滑走路にはまだ立てなくて
アラフォーという色気も無くてきつちりと白い靴ひも蝶に結びぬ
手に職があるから別に独りでも餃子の羽をサクッと崩す
肯定を求めている星月夜インクのブルーブラック滲む
転がって丸くなりたいたわたくしと苔生す石になりたいきみと
かなかなの声染み通る明け方にきみの『それから』読み通したり
交差する飛行機雲を見上げつつ添い遂げるっていいものかしら
カレーでも食べにいでよ本棚に村田沙耶香も揃っているし

銀河の狂詩曲

波多野浩子（東京）

半獣半人の星座が宙を駈けめぐる聖誕祭の近づく街よ
天の川銀河の端に住みなしてソファにうたた寝してゐる夫
甘やかな愛を希求すクレオパトラの命日に生まれてわれは
サイフォンの珈琲ごぼごぼ沸いてゐる胸の底方にきざす情動
頑なに裏を見せぬ満月よモディリアーニの女のやうに

冬銀河に荒波さかまくブラームスの狂詩曲は背信の調べ
鏡台の抽斗の奥ひそやかに揮発してゐるスミレの香水
絶対王者の愛を享けたし荒れた手でコップを磨く家刀自われは

どちらも二十歳

福島 隆史（東京）

スマホ持たぬ君の不安とロヒンギャのいのちの不安 どちらも二十歳
「残酷な消費主義社会を作つたのはわれわれ」ムヒカ・ウルグエイ大統領のことば
真の友は五人もゐればたくさんと教へてやりたい有為のきみらに
《絆》とは《繫縛》のことと辞書にあり 繫争のケイ捕縛のバクの
いつでもどこでも誰かとつながつてゐたいといふ 明日の生すら不確かな世で
AIでもつと便利になる明日は人間讃歌それとも挽歌
漱石を読めば忘れ得ぬ人たちに会ふ 苦沙弥・美禰子・先生・清
きれいごと並べてるだけの我のこと偽善の輩と呼ぶことを知り

円環

森 祐希子（東京）

これがわが軸と定めて史劇史書豆拾うごと読み継ぎてゆく
琉金の泳ぐ真つ赤な風鈴の大き短冊ゆると回る
この家のヒマワリどんと天を突き一日をかけて面めぐらす
布表紙の本の奥から我を呼ぶ夏休みとはやわらかき声
西瓜下げ日傘をさして母がゆく通りの向こうの逃げ水の先
炎天に眩暈恐れつ歩むとき白百合の香は黄泉より届く
王殺し見続けて来し塔の壁いつでもひんやり冷たく重い
八作を費やし沙翁書き継ぎし歴史くると円環を成す

私の夫

川上 恵子（神奈川県）

台所の私に居間よりメール来るお茶飲みたいと夫の催促
ラップ切る音が静寂かき消して夜勤に出掛ける夫を起こす
夫より長生きせねばとふと思いつくウオーキングの夫追い越す
お茶すすりフウツツと一息湯呑み置く同じ仕草に夫婦で笑う
「ありがと」夫の口からポロリ出た初めての言葉今夜は風だ
家中がタコ足配線転びそう直してくれない夫は電気屋
近頃は少し長いと気になって様子伺うお風呂の夫を
エビフライ二つ残ってラップされ仲良く並ぶ我らの様に

不妊治療—1999—

田巻由美子（新潟）

好きなだけ自由に使える人生を差し出してみる不妊治療に
神様にとにかく払う本日の敬意と代金三十万円
音符ならきつと美しきメロディーを奏でるはずの基礎体温表
ヒトになるもつと前から格付けを 優れたモノしかヒトにはなれない
苺ジャムどろりと落ちた食卓は空気もどろり判定日の朝
絶叫をすれば切実つぶやけばもつと切実「赤ちゃんください」
赤ちゃんが乗っていますと書いてある車を追い越すバイパス入り口
運命に逆らっている いいえ切り開いてるはず体外受精

響き合ふ

田村美和子（新潟）

心ある人の住みたるわが町にドナルド・キーン氏の記念館建つ
キーン館の書斎の窓はふるさとのハドソン川を包む朝焼け
みづみづしき十八歳のたましひを虜にしたるや源氏物語は
千年の時を隔てて響き合ふ紫式部と元米兵と
自らを（鬼怒鳴門）と印さるるキーン氏はまこと日本の文豪

日本に帰化されさらに義太夫の名手と親子の縁結びで
わび・さびも物のあはれも民族の違ひを越えて胸に響かむ
キーン氏は九十六歳いまもなほ執筆の日々健やかにして

パーキンソン病

新谷 道子（石川）

私の指震えるを見て「アルコール切れましたか」と夫がからかう
病名はパーキンソンかと尋ねれば「ほう鋭いね」と医者は言いたり
じいちゃんはパーキンソンをすぐ忘れ私の病いを「アルツハイマー？」と
目覚めればすぐ震えだす右手足パーキンソンは律義な病い
右手足病いとなれば健気にも左手足がせつせと動く
人間が百二十まで生きるなら皆なるらしいパーキンソン病
持病なるパーキンソンの振れる手で鏡を持てば顔ゆれ動く
我が動きいつ頃からかスローモーション太極拳に似ているような

雪を掴む

高田 理久（福井）

バリバリと真夜揺るがして除雪車は凍雪を掻く報復のごと
きぞ切りし髪の前よりわが裡の鉄がにほへる朝 氷点下
エアコンの効かぬ事務室キコキコと軋むパソコン降りしきる雪
所得税申告ソフト（ブルーリターン）更新メールの開くまでを待つ
他人さまの一年がかりの汗水を淡淡と吸ふ（賃貸料）セル
バケツと「ガブリッтчョ」なる親指でパワーショベルが雪掴みをり
粗目雪ガブリッтчョよりこぼれ落ちわが家の収支決算に似る
ガブリッтчョと正直者の申告書cost performance悪きをいたはりあはむ

ブルーブラック

伊藤かえこ（岐 阜）

春の夜の神にささげしくちびるを盗まれており五日の月に
偶然をよそおいながら待つ道にローズマリーの青き風吹く
つまらない出来事ばかりの文を書く万年筆のブルーブラック
君をためす言葉がさす卓上に赤唐辛子のぼつんとひとつ
天敵は君かもしれないぬ今日もまたゆつくりそりわれの横ゆく
ペディキュアの剥げた指先切りそろえどこにもゆけぬ私にもどる
言葉ひとつ飲み込めぬまま帰る夜の紅茶飲む指がすかふるえる
木犀の香りに誘われ影ふたつつかず離れず坂のぼりゆく

花の蔵

杉本 なお（静 岡）

跡取りの絶えたる蔵の酒を呑むわたしも跡を継がざるひとり
二百キロ離れた町の図書館の利用者カードをまだ捨てられず
酒蔵をおとなふ道に菜の花の土手あり土筆の小さき顔あり
さくらにはさくらのやまひ 住職がうすき木陰に立ち止まりたり
削るとは磨くこととふ酒米の祈りのやうな時を思へり
まだ冬の気配がすかに残りあるおほきな釜の底ひをのぞく
ひとひらを頬にうけつつ見上ぐればさくら舞ひ入る木の格子窓
木の匂ふケルト音楽聴きながら杜氏とともに呑む春の酒

指

原 佳子（愛 知）

右足の反りて曲がれる親指がジンと疼きて冷たき朝に
平仮名のくの字に曲がる親指をすこし伸ばして靴下をはく
親指に力を入れて立てという「やさしいボクシング」やさしくあらず
スタジオの大き鏡の前に立ちパンチの稽古ジャブストレート
息はずみ汗が流れてくる頃は打たるもよし奴のパンチに

もう立てぬノックダウンだと思いつついつしらに膝を立てておりたり
もう一度立ち上がり吾と向かい合うファイティングポーズ構えなおして
冬の夜の湯あがり 足の指はみなふつくらとして並びいるなり

やはらかき水

安川 道子（愛 知）

ゆで上がるまでの更科蕎麦の渦ゆるやかにして晩夏のちから
残照のひかりのなかに鈍色のひとすじとなる矢作川あり
わが裡に矢作のみづは流れぬるときにはげしく渦を捲きある
矢作りのいにしへ人も祈りけむ鎮まりたまへ矢作の川よ
川上へ嫁ぎゆきたりし曾祖母を思ひてゆるき水面をながむ
ツチノコを見つくるまでの時間だらうしあはせといふ果てなきものは
やはらかき水のながれに従ひて二合の米を洗ひ終へたり
矢作川とともに生きたし葦原の戦げるみどり響きあはせて

鹿のゆうゆう

秋田 彦子（三 重）

公園の桜の下にすれちがふ鹿のゆうゆうまほろば大和
角切られ蹲る鹿の耳先が風聞くごとくぴくぴく動く
甲高く啼く椋鳥の親とひな残る一羽の巢立ち促す
風にさやく草の茂みの奥深く雌呼ぶ雉の声勇ましき
毎夜来て白き腹見する守宮の子好きではないが嫌ひぢやないよ
蛸蚪の群去りて濁りの消える水田螺はぬぬつと傾きすすむ
菜園の防鳥網にかかりぬし小さき蛇の肉片乾く
カップルになりたき蜻蛉が蜻蛉おふ稲穂の風に揺れ沈みつつ

まつり囃子

中島扶美恵（京都）

わが膝に耳をひきひきうごかせる犬と聞きいる船鉦囃子
拜殿の神輿三基をおさめんと觀光客らスマホおし上ぐ
鐘、太鼓いつとき半余を打ちつづける五人の衆はITロボなる
長方形の鬼面をつけて舞う神楽「四頭身だね」孫がつつきぬ
石見神楽の早起調子を手と足にのせつつ帰る銀の月の夜
猛暑の夜囃子をさけて帰り来る医学部志望の三浪の子は
ルネ・ラリックのつくりし器にさみどりの抹茶のあわ立つ 一世紀ののち
青空に向かいて息を継ぐようなり上げ下げさるる素箋鳴尊の神輿

お慶さんとおくばい

甲斐 直子（兵庫）

露の葉は時おりゆれて蹲つんぱいに彫うられし亀の輪郭淡し
石の面に凹凸ありて撫でたれば亀の甲羅はやさしい丸み
蹲のあぶくの中へ入りゆく 油屋町の大浦邸へ
さざめきは奥座敷から お慶さんの馳走になれる坂本龍馬
はるばると海峡越えて運ばれし蹲われの傍らにあり
幕末を秘めつつ戦火くぐりたる亀との縁えんじのふしぎを思う
ときどきは眺めに來たるかお慶さん幕末の志士もてなしながら
水の面に行水終えし鳥の羽浮きおり あすはそうじをしよう

校歌絶唱

福間 駿吉（広島）

慰霊碑に佇てば聞こえてくるんです被爆学徒の校歌絶唱
とこしえに十三歳と十五歳三百余名を刻む被爆碑
被爆碑は広島一中無言館三百余名のへ鯉城の夕べ
三学年三十五学級「御楯隊」爆心一キロ圏に散華す
憧れの帽章いだき四月後に被爆死と記す校史の一章

8・6の広島一中二年生今も問われる「何処に居ました？」
原爆で生き残ったは運命と割り切るしかなし君もそうか
「昭和の日」そうか俺たちや七年生まれ中二で原爆体験したぞ

水光る

森田アヤ子（山口）

田といふ田搔かれ植ゑられ水光る晴れの五月の山の集落
逆さまに石垣映す植ゑ代田棚田を守る一人ぞわれも
植ゑしばかりの稚き苗をさやがせてわたる山田の夕風さむし
傾きてをりし早苗の立ち直り列正したり葉はまだ伸びず
分蘖にかからむやはき稲の葉を白く返して梅雨入りの風
草刈を終へて己れのために蒔く隠元十粒枝豆十粒
植ゑ条のはや分かぬまで稲しこり棚田三枚みどりが重し
急斜面に刈払機を振り上げて草刈る空に昼月白し

夏の日

藤原 靖子（高知）

十年振りにクリームソーダを飲みたればライトグリーンのはつ夏の香す
真つ白な記憶の中に浮かび来る祖母の作りし黒みつ寒天
故郷の祭りの人の輪の中に遠き緋色の夏の日ありぬ
A4のファイルにすっぽり挟みたし平成最後の真夏の日々を
悲しみをさらり躲しているようなプリンの上のチェリー一粒
「忘れ得ぬ夏よ」米寿の伯母は告ぐ八・一五祈りの中に
数学の公式のごとく始まりし今年も同じ夏甲子園
公園のブランコに置き忘れたる夏空の青を抱いて生きん

スタツカート

堺 多鶴(福岡)

あかときのシャッターを打つ雨音のスタツカートが夢想を覚ます
「死の後は俺思ひ出せ」戯れて植ゑしバラなりジャルダンパフューメ
玄関に未だ新し晴れ所のみ履きぬしあなたの靴は
思ひ出は想ひを変へて蘇る「サン・トワ・マミー」久々に聴き
たくづのの白あぢさゐが咲き初むる四度目となる回向の庭に
逃げ腰のわれにあらむか夜更け聴く「冥想曲」をリピートにして
ぬばたまの今宵の月よほんたうにあなたを解つてゐたのだらうか
ことし又あなたのバラが咲きましたジャルダンパフューメ真紅八重咲き

帰る

重松美智加(福岡)

〈認知症は前向き駐車が多くなる〉父の車がかくて停められ
母は父の愚痴をびゅうびゅう吐き出してふたりの関係今朝異常なし
天草の鳥がくつきり見ゆる日はシーツの糊がパリツと乾く
鉄琴の音に始まる自治会の無線放送ネコも聴きおり
ちちははが自ら買ひし墓地区画の隣にまばゆき石塔の立つ
ちちははが「家のことは気にせんでよか」言わなくなりしはいつからだつたか
父なりの終活ならむ背の高き枇杷の枝木が刈り込まれいる
先祖から受け継ぐ畑に茄子を採る都会へ帰る日の朝明けに

革命を欲る

中村 重義(福岡)

漠然と革命を信じぬし若き日よいま切実に革命を欲る
街中を眉根厳しく闊歩する憲兵を怖れき少年われは
北京官語、モールス信号、手旗など軍国少年に学ぶこと多し
結束され吊り上げらるる鉄骨が軋り始めぬ夜明けの空に
もの言へぬ職場にあればせめてものプロテストとしてわが短歌あり

測量士が終日使ひしメジャーの舌するする戻る夕茜空
近藤芳美の忘れてゆけるわが名刺酒吸ひて少し重たくなりぬ
古書店で求めし本の表題は「松本たかし句集」愉しまむかな

袴り／尹東柱氏

松本千恵乃(福岡)

瞑想の顔にならしむ獄死せし尹東柱の詩を聴く講演会に
心の灯消さぬ東柱よ血管に海水を打たれ続けてもなお
疑われ取監されて死すはなぜ東柱の親をも苦悩させけり
詩の中の(一点の恥辱なき)の文字한점부끄럼이없기를幾度も写す
監獄の東柱の冷えはいかばかり今日は命日二月十二日
日本人のわれがいまさら献花する「東柱、あなたも詩も忘れない」
独房の東柱がもしや見し空いまも広がる刑務所跡地
わたくしも奮い起つとき言いますね「걸어가야겠다」(歩みゆかねば)

私語のさざ波

夏野いづみ(福岡)

新人生迎えてふくらむ窓ガラス六百人の表面張力
先頭の男子は女子かジェンダーフリーの制服レモンの香りす
何を語れば聞いてくれるか昼下がりに逆白波の立つ教室で
不登校の生徒の椅子を乗せたまま机の脚が素肌めく午後
ぎこちなく語ればちぎれたネックス繋がるように生徒が声出す
「iPSのiはIだね」「違う、愛」時にはやさし私語のさざ波
不登校の子が来て吹く風スプレーの制汗剤のミントが目染む
乳房あらわに石炭を掘る女らの絵を見てふたたび教壇に立つ

ハイタッチ

田中 光子（長崎）

実験の失敗のごと子部屋の爆発しておりそう伝えおく
世話好きでお節介ゆえそだててはいけない多肉植物と孫
油性ペンはみれんがましく水性は突如書けなくなる潔さ
洗濯機のロック解除の九十秒スクワットにはすこし短し
七キロの鉛のベルトを腰に巻き夫と息子は栄螺採りいん
傷あればキズに添わせて包丁を入れたり夫の採りし鮑に
船外機の調子を試す子の船が速度を上げて湾を出でゆく
臍の緒を獣のように喰らえずにいつまで残す四つの小箱

人工弁

松尾 光浩（熊本）

弁置換せねば死亡の確率がどうか医者は冗句を交へ
心臓にメス吾が胸はさつくりと切り開かれて縫ひ合はされて
病室のベッドの上で見ると夢は無声映画の繰り返すごと
かちかちと時計のやうに鳴る鼓動アイザック・アシモフを数冊
秋の日の春夏冬と移りゆく不整脈すら気づかぬままに
松虫も鳴かぬ夜更けのカプチャーノ紫煙煙らすことさへできぬ
憂愁を秘めたる脳に囁くは人工弁に宿るゴースト
人生の四分の一を支配して人工弁のにやりと笑ふ

明日へ

松浦 淳（宮崎）

はつ夏のトマトの苗に屋根つくり綺麗な肌になれよと云ひぬ
直線のコンクリートの隙間よりモアイのごとくコスモスは立つ
朝顔は頑固な女右に巻けば左巻きにと巻き直しをり
たくましく石の継目のここかしこにピンクの花の玉すだれ咲く
そよと揺れ横に広がり涼しげに白雪草は夏の日生きぬ

旅人のアナウンサーを驚かす黄のあざやけきイペイの花よ
糞虫に喰ひ荒らされて裸木の健気に生きるミモザアカシア
山芋はか細き蔓を木に伸ばし零余子をつけて明日へとつなく

綾羽の鳩

仲程喜美枝（沖縄）

オカツバ髪ゆらし吹きゆくうりずん南風『ひみつの花園』緑陰に読めば
六・三〇午前十時四十分あの一瞬が修羅場への扉
太陽にうたふひまはりのやうな宮森の子ら命を返してあの日のいのちを
北斎の「琉球八景」の雪景色いま兵士降るみなみの空は
「あ、爆発」七十余年学校の地下に眠りある不発弾のみる夢
戦争生む魔を食ひつくせよカムリワシやいはの光る鋭き嘴
琉球は「守禮ノ邦」なり基地を刺す百万ボルトのキジムナーの視線
黄金太陽あびて孵でたる綾羽の鳩の子よ羽ばたけ未来の空へ

街に古りゆく

松本 実穂（フランス）

古びたるアパルトマンの裏庭に熟さず落ちて無花果はあり
三色旗ゆらり靡けるオペラ座に二人のロマに抱きつかれたり
シャガールの〈夢の花束〉見上げをり前の世の吾はロマかもしれず
長針のない大時計 文字盤に羊は時を示しつづける
映りある街燈の灯を置き去りにかたちを変へて月運ぶ川
ひとりづつ子らは日本へ帰りたり凹みたる靴棚に残して
子守唄はそれぞれ母語に歌はれるん街に古りゆくディアスポラいくつ
まだ青き無花果の実を手につつむ杳き約束のやうなつめたさ

黒き虹たつ谷ありて

刀根 卓代（アメリカ）

しあはせの時間を波に測ること海に向きをり移民百五十年

明治元年横浜港を出でたとふ元年者にをみなは六人

キビ畑の強き陽返すB A N G O 札 真鍮重きか首にかけられ

「子のため」とひと月四ドルに働きしきびの畑に乳ふふませて

許すこと許されざることあの日さへなければと思ふ真珠湾攻撃

ワイキキゆ三十キロの収容所黒き虹たつ蚊多きジャングル

収容所に子への指輪を作りしもそは語らざり “In American”

バラックも鉄条網も隠したり羊歯の繁りて虹の蛇這ふ